



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:29-32.

NICUに長期入院している子どもの家族が望む発達支援

坂東 千尋、岩間 茜

NICU に長期入院している子どもの家族が望む発達支援

旭川医科大学病院 NICU ナースステーション ○坂東 千尋、岩間 茜

【目的】

長期入院している患児の発達の促進に対する母親の思いを明らかにし、家族が望む患児の発達支援について示唆を得る。

【用語の定義】

長期入院は新生児期からNICUに1年以上継続して入院している状態とした。

【方法】

NICUに長期入院していた患児の母親1名に、インタビューガイドを使用し半構成的面接を1回実施した。逐語録から発達に関する言葉を抽出し、類似性に基づきコード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。情報収集期間は2013年8月であった。なお、本研究は施設内の倫理委員会の承認を受け実施した。

【事例提示】

患者紹介：在胎38週台で出生した先天性横隔膜ヘルニアの患児。出生後から継続して呼吸器の使用と麻薬の持続点滴を行い、覚醒による呼吸状態の悪化を防いでいた。

看護の実際：母親から嚥下訓練の希望があり、理学療法士や医師と合同カンファレンスを行い、口腔周囲のマッサージを看護師や母親が継続して行えるようにした。また、母親の希望に応じて同胞面会の実施やおもちゃによる遊びを取り入れた。

発達への思い：面接から、52のコード、14のサブカテゴリー〔 〕、6つのカテゴリー《 》を得た。母親は、〔発達への不安〕は常に感じていたが、《生命の危機》状態では、〔生命の危機を感じて辛く思う〕、〔鎮静中に何をして良いかわからない〕、〔寝てくれると安心する〕

と感じていた。しかし、〔成長を実感した〕、〔リハビリを取り入れて良かった〕と《成長・発達の実感》から、〔食べることへの期待と習得の難しさ〕、〔発達を促すために毎日取り入れたいこと〕、〔兄妹の関係性を築きたい〕などの《発達のためにしたいこと》を考えていた。また、〔家族の支えがある〕という《家族の支え》の実感や、〔負担にならないように看護ケアの統一〕、〔スタッフとの信頼関係が築けている〕という《スタッフとの信頼関係》の存在、〔兄の成長発達とは比較しない〕、〔NICUの生活環境は気にならない〕と《環境を受容する》ことが母親の支えとなっていた。

【考察】

親が、親としての役割を見出すためには急性期からのファミリーセンタードケアが必要である。家族と協働し、信頼関係を築くことで、母親が肯定的に自身を捉え、患児を受容し、発達支援について具体的に考える契機となったと考える。母親は運動面や、経口栄養の確立、家族で過ごす時間の確保を望んでいた。母親は兄の育児経験から患児の基本的な行動は家族などの他者と生活し、模倣することで習得できると考えていた。今後は専門職種との連携や家族と過ごせる時間の確保など意図的な関わりが必要であると考ええる。

【結論】

1. ファミリーセンタードケアを重視し、親としての役割が果たせるように関わる必要がある。
2. 家族は運動面への支援、経口栄養の確立、家族で過ごす時間の確保を発達支援として望んでいた。今後は専門職種との連携の強化、同胞面会などの家族支援を行っていく必要がある。

NICUに長期入院している子どもの 家族が望む発達支援

旭川医科大学病院
NICUナースステーション
○坂東千尋・岩間茜

はじめに

A病院のNICUには、先天性横隔膜ヘルニアの患児が1年以上入院している。呼吸状態が悪化しやすく、出生時から鎮静を行い、人工呼吸器の使用と離脱を繰り返していた。その中でも、両親は患児の成長発達の促進を望んでいた。NICUの看護の目的は救命だけでなく、成長発達への支援、親子関係形成への支援である以上、患児の成長発達への支援及び、それを支える両親への支援は必要不可欠である。

そこで、われわれはNICUにおける長期入院の子どもの発達とそれを支える母親への支援のあり方について示唆を得たいと考えた。

目的

長期入院している患児の発達の促進に対する母親の思いを明らかにし、家族が望む患児の発達支援について示唆を得る。

用語の定義

長期入院
新生児期からNICUに1年以上入院している状態。

方法1

- 1.調査期間:2013年8月
- 2.対象:NICUに長期入院していた患児の母親1名。
- 3.データ収集方法:
 - ・インタビューガイドを作成し、半構成的面接を行う。
 - ・看護記録から発達や親子関係に関する情報を収集する。
- 4.分析方法:
 - 逐語録を作成し、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。信頼性と妥当性を維持するために研究者2名で検討を行い、質的研究の経験のある看護師、新生児集中ケア認定看護師から助言を得た。

方法2

5.倫理的配慮

本研究は施設内の倫理委員会の承認を得て行った。対象である母親に対し研究目的・研究方法・研究結果の公表などのほか、協力は自由意思であること、また協力が得られなくても不利益を受けないことについて、口頭と書面で説明を行い、書面による承諾を得た。

患者紹介1

- ・在胎38週台で出生した先天性横隔膜ヘルニアの患児。
- ・出生後から継続して人工呼吸器の使用と麻薬の持続点滴を行い、覚醒による呼吸状態の悪化を防いでいた。

月齢	経過
3ヶ月	人工呼吸器を離脱し、経鼻的持続陽圧呼吸管理となる
7ヶ月	胃瘻造設術を行う
11ヶ月	再度人工呼吸管理となり、その後気管切開術を行う

患者紹介2

- ・家族構成は両親と、2歳年上の兄の4人家族。
- ・両親は出生後早期から患児を家につれて帰りたいという希望があり、育児や在宅療養のための手技獲得に積極的であった。

看護の実際

月齢	発達への支援
3ヶ月	・肺理学療法を開始する
5ヶ月	・発達遅延リスク状態を看護診断する ・母親がおもちやを持参する
6ヶ月	・ハーフバースデーに同胞面会を行う ・口腔過敏に対するリハビリが開始となる ・覚醒時に看護師の付き添いのもとでミトンを外す
7ヶ月	・覚醒時の上体挙上を習慣化する
8ヶ月	・夜間の消灯や椅子への移乗を習慣化する
9ヶ月	・窓越しで面会しやすいようにベッドの位置を変更する
11ヶ月	・気管切開術を行う
1歳	・誕生日に同胞面会を行う ・理学療法士、言語聴覚士、医師と合同カンファレンスを行う
1歳2ヶ月	・同胞面会を行う
1歳3ヶ月	・呼吸回路の位置を変更し寝返りができる
1歳4ヶ月	・同胞面会を行う

発達への思い ～インタビュー結果から～

サブカテゴリ	カテゴリ
<ul style="list-style-type: none"> ・食べることへの期待と習得の難しさ ・発達を促すために毎日取り入れたいこと ・兄妹の関係性を築きたい ・発達への不安 	患児の発達のためにしたいこと
<ul style="list-style-type: none"> ・患児の生命の危機を感じてつらく思う ・鎮静中の患児のために何をして良いかわからない ・患児が寝てくれると安心する 	患児の生命の危機
<ul style="list-style-type: none"> ・患児の成長を実感した ・患児にリハビリを取り入れてよかった 	成長・発達の実感
<ul style="list-style-type: none"> ・兄の成長発達とは比較しない ・NICUの生活環境は気に入らない 	患児と環境を受け入れる
<ul style="list-style-type: none"> ・患児の負担にならないように看護ケアの統一 ・スタッフとの信頼関係が築けている 	スタッフとの信頼関係
<ul style="list-style-type: none"> ・家族の支えがある 	家族の支え

考察1－①

母親は《患児の生命の危機》の時期においては戸惑いや無力感があり発達の側面に関心が向いていなかったことがわかった。このような状況では、子どもだけでなく、家族中心のケア（Family-Centered Care:以下FCCとする）が必要不可欠である。FCCの中核概念は、尊厳と尊重、情報の共有、参加、協働である。NICUにおいては、子どもの情報の共有や経管栄養、おむつ交換、タッチングなど実施可能な育児への参加がFCCとして行われている。このため、親が、親としての役割を見出すためには急性期からのFCCが必要である。

考察1－②

医師や看護師が家族と協働し、患児と日々関わることで、《スタッフとの信頼関係》を築けたと考える。また、《家族の支え》から、主な介護者である母親を夫を含めた家族が支えたことで、母親が肯定的に自身を捉えることに繋がったと考える。また、《成長・発達の実感》から、病状の安定、リハビリの結果を母親が実感することで発達支援について具体的に考える契機となったと考える。

考察2

母親は《患児の発達のためにしたいこと》として、患児の運動発達、遊びへの支援、家族で過ごす時間の確保だけでなく経口栄養の確立への希望が強かった。経口栄養が確立しない原因は口腔過敏が考えられる。このため、今後は理学療法士などの専門職種との連携が必要である。また、母親は兄の育児経験から子どもの基本的な行動は家族と生活し、模倣することで習得できると考えていた。養育環境としてのNICUの整備は今後の課題であるが、現在行われている同胞面会については愛着の促進だけでなく、子どもの発達支援という側面を念頭に置き継続していく必要がある。

結論

- 1.ファミリーセンタードケアを重視し、親としての役割が果たせるように関わる必要がある。
- 2.家族は運動面への支援、経口栄養の確立、家族で過ごす時間の確保を発達支援として望んでいた。今後は専門職との連携の強化、同胞面会などの家族支援を行っていく必要がある。